

認定こども園せんだい幼稚園 園長 田原 慎也

AIが進化するからこそ大事にしたいアナログなやりとり

8月13日からは鹿児島県独自の緊急事態宣言、そして、8月20日からはまん延防止等対策措置が鹿児島県に適用と、お盆を前後として新型コロナウイルスの感染が急速に拡大し、歯止めがかからない状況となっています。保護者の皆様も心休まらない日々を送っていることと思います。以前お知らせした通り、「いつ園関係者で感染者が出てもおかしくない状況」ではありますが、できる限りの対策をしながら保育業務を継続していきたいと考えています。「お仕事の日・時間のみの保育利用」、「送迎時のルール変更」など、保護者の方には既に様々な変更にご協力を賜り大変感謝しております。できるだけ早めに変更点などはお知らせするよう努めて参りますので、引き続きれんらくアプリなどでの確認をお願い致します。

私自身が子どもだった時と比べると、当たり前ながら子どもたちを取り巻く環境はだいぶ変わったなどあらためて実感します。私の母はペーパードライバーだったため、休みに出掛けるときにはいつも自転車での移動でした。汗だくになりながらも自転車を漕いで、新しいお店ができて、工事が始まったんだ、などと風景の変化を感じながら話をしたり、兄と他愛のない会話をしたりしながら目的地まで移動していたのを思い出します。

今は、私ももっぱら自動車での移動ばかりになりました。目的地まですぐに到着しますし、カーナビでテレビを見ることもできます。本当に便利になったと感じます。しかしながら、一家5人全員乗っているはずの車の中で一言も会話がないうちに気が付き、ハツとすることがあります。運転に集中する人、車内に流れるラジオに聴き入る人、外をぼーっと眺めている人。みんな同じ場所にいながらも別々のものに耳を傾け、別々のものを見ているのです。

みんなで歩いていると、自然と周りの些細なものが目に入りこんで、「あ、黄色いお花が咲いてるよ」「ほんとは」と、会話が広がっていきます。家族で他愛のない話をするだけでも、子どもはその会話の端々の単語や情報から頭の中で思い浮かべたり、考えたりと、思考を働かせているわけです。

一方通行(情報を受け取るだけ)のメディアより、双方向の思いが行き交う会話を。便利な時代だからこそ、相手とのやり取りの中で共感する、共有する、思いやる、思いを巡らせる、そんなAIには置き換えようのないスキルを培ってほしいと思います。「ほんとだね、よく気づいたね(共感・承認)」「どうしてそう思ったの?(理由を考えるきっかけ作り)」「どうすればできるのかなあ...(一緒に考える場作り)」...会話の中での大人の投げかけ次第でも子どもの考えることや発することは変わっていくと思います。AIが進化すればするほど、人間同士でしか培えないアナログなやりとりや育ちに目を向けていかなければならないのかもしれないかもしれません。